



## 具体的な実践事例

### 第3学年「未来へつなげよう！私たちの福岡市」

#### 1 本単元における社会的な見方・考え方

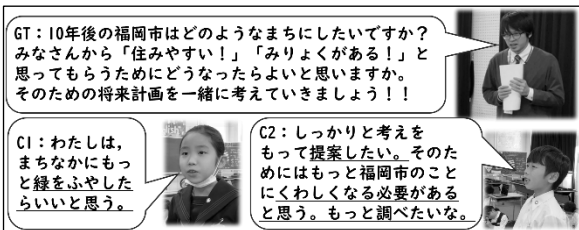
市の様子の移り変わりは「歴史と人々の生活」の内容に関わるものである。第3学年の本単元において働かせる社会的な見方・考え方は人口推移や交通、土地利用、施設の時期による変化に着目して市の特色や課題を捉えたことを基に未来志向の枠組みで市の将来の在り方を多角的に構想することである。具体的には、福岡市がこれまでの取組で便利で住みやすい都市へと変わってきたことを基に将来の福岡市をどのような都市にしていきたいか、そのためにどのようなことをしていくべきかを世代の異なる市民の声を踏まえて考えていくことである。

#### 2 本単元で重視する学びの文脈

本単元では、市の将来計画プロジェクトに提案する中で市の移り変わりを基に特色や課題を捉えることをねらいとした。そこで、実社会における課題解決を体験的に行うための社会的・実用的側面における学びの文脈を重視した。具体的には、福岡市で進行中の「市の将来計画プロジェクト」に提案することを位置付けた。その中で、昔からあるものも大切にしてほしいという人々の願いがあることを知り、福岡市の移り変わりについて調べることの必要性が生まれる文脈をつくっていった。

#### 3 授業の実際

単元の導入段階（第1, 2時）においては、「市の将来計画プロジェクト」に提案していきたいという学習課題を設定することをねらいとした。そこで、福岡市役所の方から「市の将来計画プロジェクト」を紹介してもらった場を設定し、魅力ある都市にするにはどうすればよいかを話し合った（資料1）。



#### 【資料1 将来計画プロジェクトに対する初めの考え】

ここでは、C1のようにこれまでの経験を基に福岡市の今後について発言する姿が多く見られた。その中で、C2のようにこれからも福岡市が魅力ある都市であるためのアイデアを提案する上ではもっと福岡市のことを調べる必要があるという学習の見通しをもつことができていた。

単元の展開段階前半（第3, 4時）においては、市の移り変わりに目を向ける将来計画への提案をつくることをねらいとした。そこで、GTから紹介された天神ビックバンについて「新しいビルを作ってどんどん発展してきているはずだ」という予想を基に見学・調査活動を設定した（資料2）。また、見学・調査後に提案を作成し、市役所のGTに見てもらった。ここではアイデアは何でも

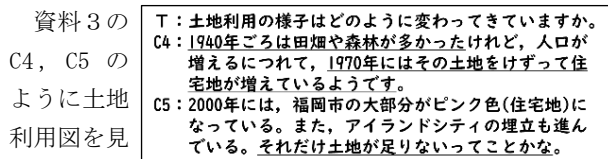
よいわけではなく、福岡市に合うものにするるとよいとアドバイスを受けた。



#### 【資料2 天神で地域の方にインタビューしている様子】

ここでは、天神見学やC3のようなインタビューを経て地域の方の「昔からあるものも大切に」という声を聞いたことで、将来計画への提案を考えるために市の移り変わりを調べて特色や課題を捉えていく必要があると気付くことにつながった。

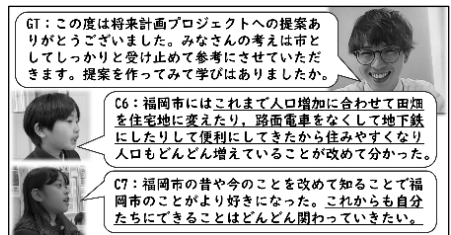
展開段階後半（5～8時）では、市の移り変わりについて交通、土地利用、主な施設の変化に着目して特色や課題を捉えることをねらいとした。そこで、3つの時期に関する資料を提示し、追究活動を設定した（資料3）。



#### 【資料3 土地利用の移り変わりについての話合いの様子】

市の土地利用の移り変わり及び福岡市の特色や課題を捉えることができていた。なお、交通や主な施設の移り変わりについても同様に学習を進め、3つの視点を基に人々のくらしがどんどん便利になり住みやすくなったことを捉えることができた。

終末段階（第9～11時）では、地域の一員として自覚し、実社会に参画することの意義を実感することをねらいとした。そこで、前回のGTからのアドバイスを基に、追究してきた市の移り変わりを基にどのようなアイデアにするかを選択・判断して提案し、市役所の方からの講評を受けて感じたことを話し合った（資料4）。ここでは、GTに自分の考えを提案し、評価を受けて改善するという活動を繰り返したことで、C6のように市の移り変わりの特色を捉え、その上でC7のように自分たちも地域社会の一員としてできることがあることを自覚することにつながった。



#### 【資料4 提案書への最終的な講評を受けての発言】

た（資料4）。ここでは、GTに自分の考えを提案し、評価を受けて改善するという活動を繰り返したことで、C6のように市の移り変わりの特色を捉え、その上でC7のように自分たちも地域社会の一員としてできることがあることを自覚することにつながった。

#### 4 考察

単元終末段階における資料4のC6やC7の下線部に示すような姿は、社会的事象の特色や意味を捉え、社会への関わり方を明確にする創造性が発揮された姿であると考えられる。それは、強い課題意識が生まれる出会いの場を設定し、課題達成のために多角的な追究活動やGTと繰り返し関わることでできる場を位置付けたプロジェクト型の単元構成にしたことが有効であったと考える。